

はじめに

「衣」「食」「住」は人間生活における最も重要な要素であり、従って人間の歴史が始まったのとはほぼ同じ頃に「衣」の歴史も始まったといえることができます。同時に「衣」を中心とする日本の染織も日本人の出現以来の長い歴史を持ち、同時にその流れの中で多様な展開を遂げてきた。しかし一般に染織品は他の文化財に比べて材質的に脆弱で、長い年月を経て現存する割合は非常に低いため、遺品によって古い時代の染織品のあり様を窺うことは決して容易ではない。

日本には、千数百年の昔から現代にいたる染織品が残っているが、これらは必ずしも各時代のあらゆる種類の染織品を網羅しているわけではない。例えば正倉院に伝えられている膨大な数の8世紀の染織品も、その内容は天皇や貴族の使用品及び宗教用具が大方で、一般人の衣服や生活用具はほとんど含まれていない。また9~15世紀にかけては遺品そのものが少なく、現存しているものは多くが神道・仏教関係の染織品である。16世紀以降現存する染織品の数は急激に増えるが、それらの主なものは公家や武家の衣服、及び舞楽装束や能装束といった上層階級に属するものである。しかし江戸時代になって、ようやく庶民の染織品にわずかながらも現存品が見られるようになる。

これらに見る限り、庶民の染織は、後述の四つの要件を優先するため、材質や技法もこれに基づいて選択されている。しかし一方で、このように必要要件を追求した結果、その装飾性においては、上層階級の染織品とは対照的に、伝統にも流行にも束縛されることの無い自由さを持ったものとなっている。

国立女子大学博物館には、江戸時代から明治・大正・昭和初期に至る庶民的な染織品が多数所蔵されている。本稿では主にこれらを例に取りながら、日本の庶民染織について考察する。

堅牢性について

庶民の染織といわれるものは、日本の染織の中で明らかに一つのジャンルをなすものではあるが、その範囲を厳密に規定することは必ずしも容易ではない。これは一つには「庶民」という言葉自体が漠然としたものであること、また庶民に含まれる人々が時代や場所によって必ずしも同じでないということなどがその原因と考えられる。例えば江戸時代には封建制度に基づいて、士農工商という序列があったが、制度上最上位に位置する武家の中でも下級の武士などでは、職人と変わらぬ生活を送るものもあり、最下位に位置する商人でも、都会で業を行うものは上級武家にまさるとも劣らない贅沢な暮らしをするものがいた。

このように庶民を厳格に規定することはむずかしいため、庶民の染織を定義することもまた困難である。しかし漠然とはしていても庶民的な染織にはそれなりの特徴が見られるから、これらに共通する特徴を抽出し、他の染織品と比較してみることにする。

まず庶民的な衣服あるいは染織品に共通しているのは、堅牢性の重視ということである。労働、主に肉体労働ということを生活の根本としている人々にとって、衣服をはじめとする日常染織品は当然のことながら丈夫なものが求められた。これはまず用いられる材質の上に顕著な特徴を生み出すことになる。

飛鳥・奈良時代以降、近代に至るまでの庶民的な衣服の生地を見ると、これらには限られた素材が用いられていることに気がつく。麻（大麻）はその最も主要なもので、正倉院に伝えられている下級役人の衣服（仕供服）をはじめとして、平安・鎌倉時代の労働者の衣服に幅広く用いられている。近世に至っても、武家女性や富裕な上層町衆の女性が、細く上質な苧麻で繊細に織り上げられた麻布（上布と呼ばれる）を夏の衣料である帷子に用いたほかは、麻（大麻）はもっぱら庶民の衣服の主要な素材として用いられた。

麻（大麻）が用いられ始めるまで衣服の主要な繊維素材であった藤や葛・楮・樺などの樹皮繊維は、麻が出現した後も、特に強度が求められる用途には用いられることがあった。例えば藤は、仕事着に仕立てられたもの（挿図1）が江戸時代に見られるほか、水に強い特徴を生かして、現在でも醤油や豆腐のしぼり袋、あるいは海女が採取した海藻を入れる袋として用いられることがある。葛も仕事着や旅行用の外套に用いられた（挿図2）。

同様に原始時代から衣服に使用されている動物の革も、その耐久性の高さゆえに庶民の衣服に適しているが、単なる耐久性のみならず、摩擦に強く、防風性にも優れていることから、羽織（挿図3）や袴（挿図4）など、多様な用途に用いられた。ただ、革の持つ強靱さはいかなる繊維製品にもまさるものであったから、格別な強度を要求される武具（挿図5）や履物などでは、鎌倉時

代以降、公家に代わって支配階級となった武家にも用いられた。しかし繊維製品に比べて固く着心地の悪い革は、そうした特殊な用途以外では、上流階級の人々の衣服の素材としては定着することはなかった。

これに関連して、素材を加工して強度と耐久性を高めたものも、庶民の染織にはよく見られる。例えば紙子と呼ばれるもの（挿図6）は、紙を裂と同じように仕立てて衣服としたもので、風を防ぎ耐寒性に優れた特徴を示すが、麻や他の樹皮繊維に比べて堅牢度ははるかに低い。しかし紙を裂き撚りをかけて緯糸とし、麻や藤などを経糸として織り上げられた紙布（挿図7）は、保温性とともな十分な堅牢性を持っているため、江戸時代末期から山形県の山間部で織られ、主として仕事着に用いられた。また木綿の布を裂いて緯糸にし、経糸に麻糸や木綿糸を用いて織った裂き織（挿図8）も、古着の再生であるとともに、これによって普通の木綿布よりも強度と保温性を高めている。裂き織は山陰や佐渡などで盛んに行われたが、これが持つ上記の特性を生かして、山林や鉱山で働く人々の労働着などに用いられた。

同様に刺子も裂に堅実度を付加するためにもっぱら用いられた。本来は小さくぼろぼろになった裂を寄せ合せ再生することを目的に考案された方法であろうが、裂を細かく縫うことで格段に丈夫さを増すことを発見して以来、これはむしろ裂に堅牢度を加えるために行われるようになった。江戸時代の町火消の袴纏（挿図9）には必ず見られるほか、山間部で薪などの荷物を背負う際に使用する袖なしの衣服などにも施されている。

そして、堅牢度を求めるために材質の選択や加工においてこうした様々な工夫が行われたことは、丈夫であるということが庶民の染織の一つの大きな特徴であると同時に、必要条件でもあったことを示している。これは支配階級に属する人々や富裕な階層が、衣服をはじめとする染織品に求める条件とは大きく異なるものであった。7世紀から現代に至るまで上層階級の衣服のほとんどが絹で仕立てられているのも、堅牢性よりもむしろ織りや染めによる装飾効果を重視してのことである。繊維の特性からして、絹は綾や縹子・紗・羅といった織法によって様々な模様を繊細に織り出すことができ、また絞りや板締め染・臘染・友禅染によっても、自由自在に色鮮やかな模様を表すことができる。上層階級の人々の衣服に絹が用いられた理由もここにあり、彼らの染織の指向するところが庶民のそれと全く異なるものであることが理解できよう。

経済性について

木綿は庶民の染織においては麻と並んで主要な材質であるが、これが庶民の衣料の中心的役割を占めるようになるのは決して早くない。木綿の種子が日本にもたらされた時期については、『類聚国史』や『日本後記』の記事から、延暦18年（799）に三河国に漂着したインド人が日本に初めて木綿を伝えたとする説があるが、この時期木綿の栽培はうまくいかなかったと考えられている。鎌倉時代の公卿で歌人であった藤原家良（1192-1264）の歌に「しきしまやまとにはあらぬから人のうゑてしわたのたねはたえにき」『新勅撰和歌六帖』（寛元二年<1244>6月頃成立）と見えるからである。

これに対して中国では、早くから綿の栽培が行われ、木綿布をつくることに成功しており、朝鮮半島でも16世紀には綿の栽培



挿図1 藤布仕事着 共立女子大学博物館



挿図2 薄茶葛布半合羽 共立女子大学博物館



挿図3 茶地文字入角繫模様革羽織 共立女子大学博物館

に成功していたと考えられている。室町時代、日本ではまだ綿の栽培は広まっていなかったため、木綿が糸や布の形で中国や朝鮮半島から輸入されていたと考えられ、応仁2年（1468）に輸入木綿をあつかう布座、小物座が専売権を争ったという記録が残っているが、綿布の現存品は管見の限り見られない。ただ室町時代・16世紀の能装束には、中国製の黄緞と呼ばれる木綿と絹の交織織物^(註1)が使用されており、これらが金襴や銀襴同様の扱いを受けていることから、当時における木綿の希少性が窺われる。

室町時代末期から桃山時代にかけてのいわゆる戦国時代には、朝鮮半島から無地の綿布が輸入され、大名や上級武将の衣服に使用されている。木綿の繊維特性に基づく綿布の利便性が^(註2)、前述の革同様、実用を第一とした戦衣などの必要性に合致したのであろう。

これに対して、我が国で綿の栽培が実際に始まったのは、先行研究により16世紀に入ってからと考えられている。また文禄年間（1592～1596）頃には大量の綿の種が大陸から輸入されていたともいわれるが、この頃はまだ木綿は限られた一部上流武家階級の消費物であり、依然として庶民生活にまでは普及していなかったと推測される。

江戸時代に入り、寛永5年（1628）には幕府が、「百姓の衣服は布 木綿に 名主及び百姓の妻女は紬まで それ以上の贅沢は許さず」という触れを出す。木綿が庶民レベルまで普及し始めるのは、この時点を待たねばならなかったと思われる。

ひとたび木綿の生産が一般化すると、これはありとあらゆる庶民の染織に用いられ、従来から麻地に施されていた型染を木綿地に施した中形染や、有松絞りに代表される各種の絞り染、伊予緋・久留米緋に代表される木綿緋などの木綿の染織文化を生み出した。これらは、ひとえに木綿生産の普及による価格の低下がもたらした結果であって、安価であるということが庶民染織にとって必須の条件であることを明快に示す事象といえよう。

木綿が普及するまで、長らく麻（大麻）が庶民の衣服素材として主役をなしてきた一つの理由は、麻が繊維素材として、実用性に優れていたほかに、安価にこれを手に入れたということがある。商品の価格は、基本的に原材料費と工賃、そして輸送費からなるから、原材料を安価に入手でき、更に布を自製できれば、工賃と輸送費を省くことができる。麻の衣服にせよ木綿の衣服にせよ、これらが安価であった理由としては、その多くが自家生産可能であるということによる。

江戸時代、江戸をはじめとする都会では商品経済が発達していたために、綿布を専門に扱う商人もたくさんおり^(註3)、農民や漁民よりも経済的に豊かであった都市在住の商人や職人達は、日本各地で生産されるようになって価格的にも安くなった木綿布やこれを仕立てた衣服を購入することができた。これに対して農村部や漁村部においては、商品経済がまだあまり発達していなかったことから、糸を購入しての生地や衣服の自家生産ということが、人々にとって大きなファクターとなっていたと考えられる。

さらに前述の裂き織なども、裂の強度を確保することのほかに、木綿の育成がむずかしく商品経済も活発でなかった東北地方の北部などでは、入手しにくい新品の木綿布に代わるものとして、安価に衣服を入手するための重要な方法であった。

なおこれとは反対に、地場の材料を用いれば経済性をもたせることから、庶民の染織品には地域の特産品を用いたものが多く



挿図4 茶地格子模様革袴 個人蔵



挿図5 鶯色糸威大鎧 共立女子大学博物館



挿図6 白地四菱縹模様紙子袖無羽織 個人蔵

見られる。紙子は、江戸時代には白石（宮城県）や美濃（岐阜県）、土佐（高知県）などで作られていたが、これらの地域はいずれも上質な和紙の産地であり、これを材料とする紙子は、現地においては材料を入手するための輸送費を伴わないため、当然安価あったと考えられる。

江戸時代後期には、更紗染や小紋染を施した華やかな紙子が登場するが、それらはこれらの地域で生産された和紙を、加飾を施す業者のいる京や江戸まで輸送し、そこで商品化された。ただしこれらは、輸送費と人件費が加わって、結果として安価ではなくなったため、庶民の染織には分類できない。

以上のように、安価であるという庶民の染織の特徴は、同時に自家製の多いということや、素材や加工技術に地域的特色を表すものが多いということとも深く関係している。

地域性について

そこで次に庶民染織における地域性ということについて考えてみたい。すでに紙子の例に見たように、庶民染織の地域的特色はまず染織品の素材という面に著しく表れる。例えばアツシと呼ばれるアイヌの衣服（挿図10）は、オヒョウという北海道・東北地方に自生する落葉喬木の樹皮繊維を素材とし、アツシカラベと呼ばれる原始的な居座機で織られる。樹皮色そのままの無地のものが多いが、黒や茶・緑の縦縞を表わすものもある。衣服に仕立てた場合には、木綿をアップリケし、その上に刺繍で独特の括弧文や渦巻文・獣文などを表わすものが多い。木綿は近代までは北海道においては貴重品であり、部分的にしか用いることができなかったともいわれ、アツシにおけるオヒョウと木綿の使用状況は、まさに北海道という地域性を如実に反映したものといえよう。

同様のことは沖縄の染織品にも見ることができる。琉球王府時代の沖縄の染織品に見られる代表的な素材は、絹・麻・桐板（トンビヤン）・木綿・芭蕉であるが、このうち絹は、首里の王侯貴族の衣服などに用いられたし、龍舌蘭という植物で織られたといわれる桐板も、高級な織物として琉球王府に納められていた。また木綿も水質の影響で沖縄では栽培面積が広がらなかったことから士族階級の衣服（挿図11）に用いられるほかは、庶民の染織ではわずかに手巾（ティーサージ）など限られた用途に用いられるほど高価なものであった。

またこの時代の沖縄では、麻が主に王族や氏族の使用のためや、実質的な支配者であった薩摩藩への貢納布として生産されていたため、庶民からは遠い存在であった。そこで庶民の衣服の主要な素材とされたのは、沖縄の土壌に適し各島々で容易に栽培できた芭蕉（挿図12）であった。

これもまた、経済性を求められる庶民の染織がしばしば自家生産を行うために、強く地域性を反映する結果になるという一例である。

ところで地域性ということに関しては、同じ素材や技法を用いながらも地域によって異なった意匠傾向を表すものが庶民の染織にはよく見られる。江戸時代についていえば、公家や武家のように、衣服が封建制度の中で身分の表徴として固定されており、一種制服的な意味合いをもっている場合には、衣服の意匠に地域性が表れることはない。また富裕な町人女性の着物などはほとんど



挿図7 紙布仕事着 共立女子大学博物館



挿図8 裂織仕事着 個人蔵



挿図9 紺木綿地加藤清正図刺子袴纏 共立女子大学博物館

京や江戸で作られ、しかも意匠はこれも京や江戸で刊行される小袖雛形本（着物の流行模様を集めたスタイルブック）を手本にしてその時々流行に合ったものが選ばれたから、着用者がどこの人であってもこれに地域性が表れることは殆どなかった。

これに対して着用者による自家生産がほとんどの庶民の衣服では、それぞれの地域に固有の模様が表されることが少なくない。緋の模様はその顕著な例で、例えば九州の久留米緋は木綿の緯絵緋（緯糸をくくって染め分け、これで絵柄を表す）で、松竹梅や鶴亀・鯉・城・舟などのほか、竹に雀や牡丹に獅子・大黒に打ち出の小槌・高砂の尉・媼などの模様がよく表される。これに対して山陰の弓浜緋は同じく木綿緋でありながら家紋やそれに近い柄に特徴がある。また「津軽こぎん」と呼ばれる刺子は、繊細な幾何学模様が特徴とされるが、これも津軽の東部（現弘前市東部～黒石市あたり）（挿図13）・西部（現弘前市西部あたり）（挿図14）で様式をやや異にする。

実用性について

染織における実用性とは、材質や形状・技法などがその染織品の用途に合わせて選択されることを指すが、庶民の染織ののでは、この実用性ということが重要な必要条件となる。

例えば材質と加工についていえば、炎の熱を遮り、水に濡れても丈夫でなければならぬ火消の装束には、刺子を施した木綿が用いられたし、合羽と呼ばれる旅行用のコートには、長時間着用しても疲れないように、軽くかつ風を通さない和紙で仕立てられたものがあったが、急な雨にそなえて、その表面には水をはじく桐油や柿渋を引いたものがあった。これらは実用性を求めている工夫といえよう。

形状や仕立てに関しても、例えば屋内での製造作業や田畑での農耕作業に従事する人々が着用する衣服は、袖口が細く詰まった筒袖形の形状をなすものが多く（挿図8）、袴も股に比べてふくらはぎや足首の部分がずっと細く仕立てられている。これは武家や公家・富裕な町人が着用した小袖や袴の袖や裾がたつぷりとし、あるいは長大であることとまったく対照的である。

また同じ庶民の衣服でも、外套的な意味をもつ法被や羽織の身幅や袖口が広く、前身頃も重ね合わせることなく紐や紐についたボタンで簡単に留めるように作られている点も、着脱の利便をはかっていることである。更に馬に乗る際に着用する羽織などは、裾から背の中央のかなり高い位置まで縫わずにおかれ、騎乗の際には後身頃が馬の背中中で左右に分かれるようになっている。

一方、町火消が火事場で着用する刺子の袴纏に、表ではなく裏に華やかな模様を表したものがあつた（挿図9）、これは一見、消火の際に袴纏の表が水びたしになるため、絵が流れ落ちることを防ぐための工夫のように見える。しかし実際には、それ以上の実用性が求められて、このようなことがなされているのである。

消化設備や機材が不十分な江戸時代にあつては、現代の消防士にあたる町火消は、当時最も危険な職業の一つであつたから、雲龍文や雷神文などの大柄で華やかな模様を、肌に触れる装束の内側に描くことは、からだに彫つた刺青同様、火事場での恐怖心を



挿図10 茶地アツシ 共立女子大学博物館



挿図11 縹木綿地桜春草模様紅型衣裳 共立女子大学博物館



挿図12 薄黄地縦縞模様芭蕉布衣裳 共立女子大学博物館

忘れさせ勇気を高揚させるための重要な役割を持っていた。従って模様を裏地に描くということは、火消絆纏の用途を反映したものといえることができる。

火消絆纏は、ほとんどがリバーシブルに仕立てられており、表には所属する組の名前や印のみを表し、裏には前述のような模様を表わしている。消火作業中には表を出して消火にはげみ、消火作業終了後は、裏を表に返して華やかな模様を見せ、意気揚々と引き返してきたのであろう。浮世絵にはそうした姿を描いたものがあるが、結果的に「心理的実用性」とも言うべき用途から生まれたこうした模様は、火消絆纏を非常に装飾的なものにし、庶民染織独自の美を生み出すことになった。

庶民染織の美

以上のように庶民の染織は、堅牢性・経済性・地域性・実用性ということを大きな特徴あるいは条件とし、材質や加工法・仕立てなどもこれらの要件に合致したものが選ばれるのが普通である。そしてこうした要件のみを満たし、全く装飾性を伴わない染織品もある。

しかし江戸時代以降の庶民の染織を概観する時、上流階級の人々が用いた様々な高級染織品よりもはるかにおもしろい装飾性を示すものがしばしば見いだされ、その中には、火消絆纏のように強烈な印象と美的感動とをわれわれにもたらすものが少なからず見られる。

庶民の衣服に見られるこうした独特の美しさは、果たしてどのような背景のもとに生じ、またどのような特徴を持っているのであろうか。それはまたこれを表す技法とも深く関わっていると考えられる。

例えば刺子は、もともととは裂や衣服の破れをつくろったり、補強したりするために施されたものであったが、やがて縫い方に規則性や意図的な変化を加えることによって、様々な模様が表されるようになった。当初一方向に平行縫いされていたものを、縦・横・斜めに縫いつないで幾何学的な模様を表したものが各地の仕事着（挿図 15）やのれんなどに見られる。

東北・津軽地方で発達した前述の「こぎん」（挿図 13.14）は、主として紺染の麻布を白と黒の木綿糸で刺したもので、模様の基本形は約 30 種にもものぼるといわれるが、同じく南部地方の「菱ざし」も浅葱の麻布を白の木綿糸で縫ったもので、菱形を基本に造形することからこの名がある。両者はともに美しい幾何学的な模様を表す刺子であるが、もともと生活のゆとりやぜいたくから生まれたものではない。木綿の使用を禁止された農民たちが、麻布の仕事着を補強し保温性を高めるために考え出したものが、結果的に多くの魅力的な模様を生み出すことになったのである。そして基本的に自家製品である「こぎん」や「菱ざし」には、商品として作られたものにはとうてい見られない精巧さと技術の結集が見られる。

染物の模様でも、例えば職人や漁師・商人の絆纏や羽織の模様のように、本来は自分の職掌や所属する組織、主家の家柄などを明示するためのしるしであったものが、いつしか装飾性を強め、模様としても十分に装飾性を持つものになったものも少なくない（挿図 3）。それらはしばしば意匠化された文字や象徴的なモチーフを表し、それが上流階級の衣服にはみられない大胆な意匠を生み出し、我々を魅了するのである。



挿図 13 紺麻地菱繫模様こぎん仕事着 共立女子大学博物館



挿図 14 紺麻地四菱入菱繫模様こぎん仕事着 共立女子大学博物



挿図 15 紺地裂織袖無仕事着 個人蔵

そしてこれが更に進むと、町火消の装束に見られるような、装飾的であることにいっそう力を注いだ模様も現れることになる。それは封建体制下で出口を求めている庶民のエネルギーの発露の場ともなり、庶民が大きな活力を持って生きた近世以降においては、様々な庶民の衣服や染織品にこうした傾向が見られるようになる。

このように庶民の染織においては、意匠は前述の四つの要素を満たしてゆく過程において第二義的に生じてきたものではあるが、結果として独自の装飾的な世界をつくり上げている点に大きな特徴がある。そしてこれは、庶民の染織に用いられた加飾技法が、上流各階級の染織に用いられたそれと大きく異なるものであったこととも関係している。

庶民染織の技法

庶民の染織に用いられる技法は、公家や武家・富裕な町人の染織品に用いられるそれとは明らかな違いが見られる。例えば錦や緞子・金襴などといった複雑な織技や、友禅染・茶屋染といった繊細な染技は、歴史を通じて近代まで庶民の物となることはなかった。それは、一つにはこれらがさきに指摘した庶民の染織としての四つの条件にそぐわないためである。錦や緞子などの複雑な織物組織は、細く均一でなめらかな絹糸以外の素材をもってしては織製不可能であり、経済的理由や耐久性の関係から麻（大麻）その他の樹皮繊維や綿糸を使わざるを得なかった庶民の染織品にはこうした紋織物は遠い存在であった。また友禅染や茶屋染のように複雑な工程と絹や上布といった上質の生地を必要とする染めも、経済的な理由に加えて製作地がごく限られているという地域的な条件が大きく作用して、一般庶民の手に渡ることは殆どなかった。

これらに対して縞織や緋・絞り染や中形染といった各技法は、上層階級や富裕な階級の染織品にも見られるが、庶民の染織に特に多く用いられている。例えば、緋の技法は武家の式服である熨斗目や能装束の一部にも用いられることはあったが、最も中心となるのは各地の民芸的緋である。また友禅染は、江戸時代18世紀初頭に技法が完成して以来もっぱら上層町人女性たちの小袖や帷子を飾ったが、一般庶民の生活においてもこれを簡略化した技法である筒描き染で、「夜着」と呼ばれる木綿の掛布団（挿図16）や漁師が祝い着として正月などに着る「万祝（まいわい）」（挿図17）、のれん、端午の節句の幟などに模様を表わした。

ただし、庶民の染織に用いられる技術の内容や水準、使用される素材には、上層・富裕階級のそれとはかなりの違いが見られる。同じ縞・格子を織り出すにしても、富裕な人々が用いたのは絹であり、庶民が用いた木綿であった。また武家や上層町方の女性の小袖に見られる友禅染は、細く繊細な糸目糊と多彩な染料を用いた精巧で色鮮やかなものであったが、庶民の筒描き染は、同じく華やかではあっても、技術的にはこれよりもかなり素朴なものであった。

とはいえ、上層・富裕階級が用いたものと庶民が用いたものでは、それぞれがともに異なった美しさと魅力を持っているばかりでなく、刺子や緋、中型染などの主に庶民の間で発達した技術を用いたものは、上層の人々の染織品に見られない一層独自の美の世界を生み出している。

同様のことは、庶民の染織に多く用いられてきた藍染についてもいうことができる。藍染は、絞り染めや中形染、刺子を施した庶民の染織品にしばしば用いられるが、これは藍が染料として堅牢で、水に落ちにくく光に強いばかりでなく、価格的にも安いということによると考えられる。

一方、藍は洗えば洗うほど色味がさえて美しさを増すものであり、結果的にはむしろこうしたことによって、庶民のみが藍独自の染織美を手にするのできることもなっているのである。



挿図16 紺木綿桜樹春草模様夜着 共立女子大学博物館



挿図17 縹木綿地高砂模様万祝 個人蔵

むすび

このように特に江戸時代には、庶民の染織はそれ自身が多様に分化していく。基本的には前に述べたいくつかの要素や特徴を備えながら、その比重や性格のかなり異なった様々な形式の染織品が現れるのが、近世以降の庶民の染織の特色である。こうした多様さが庶民の染織の大きな魅力であり、おもしろさであることはいうまでもない。最近まで、庶民の染織は日本の染織史の中では軽視される傾向にあったが、以上のような点に注目するとき、日本の庶民の染織は興味ある多くの問題と含んでおり、また美的に見ても充分鑑賞に価するものであると言える。

註1 黄緞は、経に絹糸、緯に木綿糸を用いた縹子組織の織物で、これに金糸や色糸の絵緯を織り入れて模様を表わす。中国・明時代にはかなり製織され、わが国にも舶載された。

註2 綿の良いところは、(1) 吸水性に富む、(2) 濡れると10~20%強度が増す、(3) アルカリや熱に強い、(4) 染色しやすい、(5) 弾力性、伸張性に富む、(6) 繊維断面が中空構造のため、軽く保温性に富み、ソフトな肌触りがあることなどである。

註3 絹もの衣服を「呉服」と呼んだのに対し、綿布や木綿の衣服は「太物」と呼ばれ、都市部には、これを専門に扱う業者があった。

Textiles of ordinary people

- Characteristics and beauty seen through the Museum Collection -

NAGASAKI Iwao

Abstract:

In the textiles of commoners, robustness, economic efficiency, regionality, practicality are regarded as major characteristics or necessary conditions, and matching with these requirements such as material, processing method and tailoring were chosen.

However, when reviewing the textiles of common people since the existing objects of modern period, things that show much more interesting decorative properties than the various high-class textiles used by people of the upper classes are often found. And there are not a few things that we have a strong impression and aesthetic impression can be seen.

Pieces housed in the Kyoritsu Women's Educational Institution, with a focus on *saihouhinagata* produced at the Kyoritsu Women's Vocational School

HASEGAWA Saori, TAKAHASHI Yuko, TANAKA Yoshie

Abstract:

This study focused on *saihouhinagata*, miniatures of clothes and tools for daily living, among pieces donated by the alumnae of the Kyoritsu Women's Vocational School. To efficiently acquire sewing technique, female students from the Meiji through the Taisho and Showa periods produced *saihouhinagata* in order to save time and money. The study aimed to generally investigate, as well as precisely classify and name these previously unexamined works, in order to create basic data to enhance the future sewing education of the school's female students and the status of the school. A total of 396 *saihouhinagata* (31 from the Meiji period, 181 from the Taisho period, 90 from the Showa period, and 94 undated) were examined, and classified based on their characteristics. Most were unnamed, and we therefore named all the unnamed pieces based on the records of pieces donated by the alumnae or from other girls' schools. In addition to the aims above, the study revealed basic information on *saihouhinagata*, which will serve as valuable data in a variety of studies.